

全労済協会 慶應義塾大学寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造－新しい福祉価値をどのように生み出すか－」

講義日：2023年11月28日

「地球環境問題と宗教」

同志社大学神学部 教授 小原克博 氏

■日本における宗教を取り巻く状況

本日は「新しい福祉価値をどのように生み出すか」という授業全体のテーマに合う形で、地球環境問題と宗教についてお話をさせていただきます。

日本の歴史と宗教の関わりはとても長いのですが、昨年の安倍元首相の銃撃事件以降、宗教に対する関心がいろいろな意味で活性化してきました。政教分離の問題や信教の自由などが議論され、「宗教2世」という今まであまり見えていなかった存在に光があたるようになりました。また、私的領域と公的領域の再配置も行われています。これはどういうことかということ、例えばこれまで宗教2世が困難を抱え、公的機関に助けを求めたとしても、家庭の問題とされてきました。他にも嫉と称する暴力や、男女の痴話喧嘩などは私的な問題とされていたわけです。しかし今はそうしたことを私的な問題として放置できなくなっています。私と公を単純に切り分けることで問題が生じてきたので、それを見直そうと関心が高まっているのです。私も関わってきたNHKの番組が「問われる宗教と“カルト”」をテーマにシリーズ化したり、宗教2世にフォーカスした番組を放映したり、この1年で宗教の問題を取り巻く状況が大きく変わってきていると感じます。

ここで、SDGsを宗教の視点から考えてみましょう。SDGsの理念は「誰一人取り残さない」というものです。それはもちろん望ましいことなのですが、本当に可能なのかを現実的に考えてみましょう。まず「誰一人取り残さない」ということの前に、私たちの社会ではまず自分が取り残されないことに強い関心が向けられており、他者のことを考えるための価値の源泉を探していく必要があります。歴史的に振り返ると、源泉の一つが宗教でした。宗教的な視点は私たちの日常とは異なるところもありますが、特異性があるところにむしろ学ぶべき価値があると思います。私たちの日常は科学的合理性に支配されています。それを踏まえて、違う枠組みの宗教的世界観が役に立つ可能性があるわけです。新しい福祉価値を創造するためには、古い価値の中から必要なものを取り込んで再構築していくことが求められます。

地球環境の問題は、人間の消費行動と関係しています。消費行動をかき立てる仕組みの背後にはAIとビッグデータがあって、ネットで買い物をした時や動画を見た時にレコメンドという形で欲望を絶えず刺激します。こうした刺激の循環に抗うためには、私たちの生活を外部から見る視点が重要になります。そこに、私たちが宗教を学ぶことの一つの意義があります。

私たちは、宗教に対する基本的な知識をどこかで学ぶ必要があります。知らない対象には誤解、偏見、憎悪の感情を持ちやすい。人間の多様性を学ぶためにも、やはり宗教は欠かすことができないのです。

■ジャスティスを地球環境に広げる

世界における宗教は多元化しており、単純に色分けすることはできません。例えばアメリカにおいてはキリスト教の影響は強いのですが、都市には教会があり、モスクがあり、ヒンドゥーの寺院があり、仏教寺院が当たり前にあります。アメリカだけでなく、世界が宗教的に多元化しています。中心点も変化しています。人口比でいうと、イスラムが最も多いのは中東ではありませんし、仏教はインドで発祥しましたが、今はインドに仏教はほとんど存在しません。中心点が変化しながら、伝播し、広がっているのです。世界的にはキリスト教徒が圧倒的に多いのですが、2070年にはイスラムが世界人口で1位になると言われています。世界における宗教のダイナミズムが変化を促しているのです。

環境問題を考えるために、事例としてキリスト教を取り上げます。1967年に *Science* 誌に掲載された論文をきっかけに、リン・ホワイト論争が起きました。ホワイトの主張は、当時すでに起こっていた深刻な環境問題の原因はキリスト教の人間観、世界観にあるというものです。人が自分のために自然を搾取するのは神の意志だという内容です。これには当たっている面もありますが、一面しか捉えていません。

聖フランチェスコは人間をも含むすべての被造物の平等性という別の考え方を示しています。キリスト教には保守派からリベラル派まで大きな幅があり、保守派の代表的な例がトランプ氏の支持者たちです。キリスト教保守派は進化論の否定、地球温暖化の否定をしています。キリスト教は、隣人と隣人以外に境界線を引いてきました。これが差別を生んでいます。聖書の重要な概念にジャスティス、正義という言葉がありますが、この正義という概念を人間社会の中だけでなく、地球環境に広げていくことが模索されています。

■プラネタリー・エシックスに向けて

日本の生命観、自然観、動物観にフォーカスしてみます。西洋の権利概念や人権意識は個に注目します。日本では、共同体や繋がりが注目されています。自立した個によって成り立つ社会というよりも、お互いの関係を重視し、世間を意識し、空気を読むことを重視する社会です。日本では、人間と動物の命、自然の命も、根源においてはやはり繋がっていると理解されていました。例えば、日本各地に見られる動物供養の例があります。鯨やヒグマの供養碑、さらにはシロアリにまで供養碑を設けています。最先端のビジネスを行う製薬会社が、菌に対して慰霊碑を設けている例もあります。西洋人からするとクレイジーですが、先端ビジネスと菌のために慰霊することが両立するところに日本文化の面白さがあります。鳥獣戯面を見てもわかるように、人間と動物の垣根が低い。かつての日本人は、人間が動物を犠牲にしなければ生きていけないことに痛みを覚える回路を持っていました。こうしたことを忘れるのではなく、汲み取るべきものを汲み取って、新しい価値創造に繋げることはできないか、考えてみましょう。

地球環境には限界があり、その限界を知る必要があります。世界の成り立ち、宇宙の成立を考えるコスモロジーは宗教が担ってきました。今は、宗教は心の問題を扱うものと矮小化されていますが、元来はそうではありません。現代の課題に対応するコスモロジーを再構築する必要があります。1つの地球に暮らすしかない私たちには、新たな倫理、プラネタリー・エシックスが必要です。ローカルな文化や宗教的特性を積極的な利他性の源泉とし、新たなプラネタリー・エシックスを構築していく必要があると考えています。

<文責：全労済協会調査研究部>